

．全国の大学・学生ボランティアセンター視察調査報告

秋葉 武・足立 陽子・斎藤 真緒・白樫 俊・南 多恵子

本学にボランティアセンターを設置するにあたり、既存の大学ボランティアセンターの運営スタイルを学び、開設の一助とするために、全国の6つのボランティアセンターを対象に調査を行った。

まず、関東地域の主要なボランティアセンターの状況を知りたいと考え、2002年9月26日・27日の2日間、関東地域を訪問した。対象として、「東京ボランティア・市民活動センター」、「明治学院大学ボランティアセンター」、「淑徳短期大学ボランティア情報室」、「国際基督教大学（ICU）サービスラーニング設置準備室」の4箇所を訪れた。それらを選択した理由として、「東京ボランティア・市民活動センター」は、大学ボランティアセンターではないが、そのネットワークを結ぶ「場」を設定し、幅広い情報把握を行っているため、各大学の情報を得る目的で依頼した。「明治学院大学」と「淑徳短期大学」は、早期からボランティアセンターを開設し、専任のコーディネーターのもとに比較的活発な活動がなされているボランティアセンターの例として、訪問調査を依頼した。また、「国際基督教大学（ICU）」はボランティアセンターではないが、サービスラーニングという点に注目していることから、教育的観点から参考になると考え、調査を行った。調査者は、秋葉武、斎藤真緒、南多恵子、足立陽子の4名である。

次に、企画研究・ボランティア研究グループが、同じ京都市内にある「龍谷ボランティア・NPO活動センター」と「きょうと学生ボランティアセンター」を対象に行った調査結果を記載する。「龍谷ボランティア・NPO活動センター」は、京都市内でいち早く開設された大学ボランティアセンターの例として、訪問調査を行った。また、「きょうと学生ボランティアセンター」は、大学内にある大学ボランティアセンターではないが、もともと学生の組織化などを行い、情報収集や人材育成など、学生を対象にした幅広い事業を展開していることから、情報やアドバイスを得る目的で、調査を行った。

DATA 1 東京ボランティア・市民活動センター

Tokyo Voluntary Action Center = TVAC

【所在地】

〒162 - 0823

東京都新宿区神楽河岸1 - 1 (飯田橋セントラルプラザ10F)

TEL : 03 - 3235 - 1171 FAX : 03 - 3235 - 0050

【調査日】

2002/ 09 / 26 10 : 00 ~ 12 : 30

【回答者】

熊谷 紀良さん (主事)

東京ボランティア・市民活動センターは、関東地域におけるボランティア・市民活動に関する相談事業を行うだけでなく、人材育成・研修事業、調査・研究活動など、幅広い取り組みを行っている。近年、大学にボランティアセンターが次々に設置されてきたことに伴い、大学との関係づくりを重視している。とりわけ、これから新しくボランティアセンターを立ち上げようとしている学生や教員・職員への支援活動を中心として、ボランティアセンター同士の情報交換や各ボランティアセンターの特徴についての情報把握などを積極的に展開している¹。また、大学への呼びかけにも力を入れている。今回の視察では、関東地域を中心とする既存の大学ボランティアセンターの活動状況や、今後新たに大学にボランティアセンターを立ち上げる際に考慮すべき点や課題について、お話を伺った。

1 . 論点

大学のボランティアセンターを比較検討する際に、いくつかの検討項目が

¹ 例えば、「大学・短大ボランティア活動支援研究協議会」の開催や、「大学・短大における学生ボランティア活動支援連絡会議」の運営を行っている。

ある。第一に、そもそも、大学でのボランティアセンターの設置という点に関わって、大学の教育・研究活動とどのように結びつけるのかという、ボランティア教育およびボランティア研究に関する問題がある。第二に、ボランティアセンターの運営主体、意思決定体制および運営体制をどうするかという点がある。この点にかかわって、センターの運営に関する問題、とりわけボランティアコーディネーターの位置づけに関する問題も派生する。以下、これらの検討項目に即して、ヒアリング結果をまとめていきたい。

2. 各大学のボランティアセンターの状況

(1) 研究・教育活動との結びつき

まず、すでに大学に設置されているボランティアセンターの状況についてであるが、大学の授業や研究・教育プログラムとリンクしている事例としては、桜の聖母短期大学、共立女子大学、法政大学などの取り組みが参考になるということであった。法政大学現代福祉学部では、実習指導の職員も配置して、実習とリンクさせた取り組みを行っている。さらに、講義を通じた事前・事後の振り返りも実施している。また常磐大学なども、新たに大学としてボランティアセンターを立ち上げる準備段階にある。なお、ボランティアセンターの立ち上げと教育活動との関連性という点については、福祉系の学部あるいはミッション系の大学の方が、教育・研究との整合性が明確に打ち出しやすいという特徴を確認することができる。

(2) 運営主体

また、運営主体については、大きく分類して、大学主体（桜の聖母短期大学ボランティアセンター、淑徳短期大学ボランティア情報室、明治学院大学ボランティアセンターなど）と、学生主体のボランティアセンター（長野大学ボランティアセンター「ふらっと」、早稲田大学ボランティアセンター、神戸大学総合ボランティアセンターなど）とに分けることができる。また例外的に、関西学院大学ヒューマンサービスセンターのように、大学と学生との連携による運営スタイルもある。

これから新たにボランティアセンターを作ろうとする場合にも、学生の側の動機と、大学側の動機では、その内容が異なっている。学生が主体となっ

てつくろうとする場合には、すでにボランティア活動をしている学生やサークルなどが中心になって、学生のニーズを基盤とした取り組みになるのに対して、大学が主体となる場合でも、センター設置におけるイニシアティブの違い（学長主導か、学生部主導か）で異なっている。学生部主導の場合は、学生のニーズを基盤にした活動を志向するが、学長や理事会のイニシアティブの場合、新学科設置や新キャンパスの設立と関連している場合が多い。また、都市部の大学に多い傾向であるが、キャンパスが複数に分かれていると、一般的にセンターの運営が非常に難しくなる。こうした設置に関わる諸条件から、ボランティアセンターの設置は、現在のところ私立大学に偏在している（国公立大学は動きづらい）。例外としては、横浜国立大学が、学生を中心として意欲的な取り組みを行っている。また、全国分布としては、関西でのボランティアセンターの設置数は、関東と比べてまだ少ないのが現状である。

なお、東京ボランティア・市民活動センターでは、大学でのボランティアセンターの新設に関して、とりわけ職員への支援を重視している。学生との接触機会および窓口での対応は、ボランティアコーディネーターを中心とする職員である場合が多いので、職員をいかに巻き込んでいくのかが重要である。とりわけボランティアコーディネーターの設置は、職員の人事異動の影響を直接的に受けないので、安定的なセンターの運営を期待できる。既存のボランティアセンターとしては、明治学院大学や淑徳短期大学が、ボランティアコーディネーターを配置している。ボランティアコーディネーターを配置する場合に、ボランティアセンターを支えている学生（ボランティアサークル）の活動実態をきっちりと把握しているかどうか、センター運営にとって鍵となる。同様に、スーパーバイズできる人材を配置できているところは、円滑な運営が行われている。しかし、職員が、ボランティアセンター設置に主体的に関わるケースは非常に少ない。職員に対しては、出張経費が出ない大学が多いことも、その一因となっている。また、ボランティアセンターの設置にかかわって、教授会等でのコンセンサスの形成も困難である。そういう点で、イニシアティブをとることができる教員の存在も重要となる。

(3) 運営方法

ボランティアセンターの体制および運営方法であるが、運営主体が大学主導か学生主導かによって異なるだけではなく、大学と学生がどのような連携をとるかによっても異なってくる。大学と学生との連携がうまく機能しているセンターとしては、明治学院大学ボランティアセンターがある。コーディネーション業務は大学の責任で行い、実際の活動に関するネットワークの構築や情報交換などは学生主導で行う運営方法がうまく調和されている。

3. 大学におけるボランティアセンターの課題

ボランティアセンターの設置は今後きびしくなる。ボランティアセンターだけでは維持するのがますます難しくなっていくことが予想される。したがって、例えば、地域コミュニティとのインターンシップ、あるいは実習指導など、大学の教育機能とのリンケージが重要になると思われる。

また、大学としてのリスクマネジメント、危機管理についての意識が、非常に弱い。リスクに対して保険が存在しない分野も多い(コーディネート業務など)。その点に関して、たとえば明治学院大学では、ひとつひとつのケースについて個別に検討を行ってから、コーディネートを行っている。

大学にボランティアセンターを設置する場合、教育的観点を重視するのか、学生支援という観点を重視するのかで、その性格が異なってくると思われるが、東京ボランティア・市民活動センターとしては、教育的観点として、サービスラーニングの視点を取り入れることを勧めている。アメリカやイギリスではすでに、大学の教育、さらには研究プログラムとして展開されている。こうした取り組みを参考にしつつ、教育的観点、さらには研究的観点の具体化が求められている。

また、学生支援と、教育・研究活動を結びつけるという点で、大学院生をその中間的存在として位置づけることも、新しいボランティアセンターのひとつの発展方向として、検討に値すると思われる。現段階では、早稲田大学ボランティアセンターが、OBからの援助を受けている。

4. 所感

大学のボランティアセンターは、今後、各大学間のボランティアセンター

同士のネットワークをどのようにつくっていくのかという課題と同時に、それぞれの大学のオリジナリティをいかに発揮するかが非常に重要になってくると思われる。そのためには、単に学生支援という観点だけではなく、教育的観点による、ボランティア教育の抜本的充実が必要になってくる。すでにボランティア活動に自主的に参加している学生だけではなく、ボランティア活動に関する知識や基礎的なスキルについて、あらゆる学生が習得できるカリキュラム体系を工夫する必要がある。また、インターンシップや実習などの事前・事後のフォローアップのあり方、さらには評価方法の見直しおよび改善も同時に必要となる。

また、研究機能を備えたボランティアセンターは、日本ではまだ確立されていない。大学という強みを発揮するためには、教育的観点だけではなく、ボランティアに関する研究活動をどのように位置づけるのかということも、積極的に追求していく必要があるだろう。

(文責：斎藤 真緒)

DATA 2 明治学院大学ボランティアセンター

【所在地】

(白金校舎)

〒108-8636

東京都港区白金台1-2-37

TEL&FAX: 03-5421-5131

【調査日】

2002/09/26 14:00 ~ 16:00

【回答者】

谷津倉 智子さん(ボランティアコーディネーター)

1. ボランティアセンターの概要について

設立年月	1998年 5月		
ボランティアセンターのタイプ	大学主導設置型	運営形態	学生との協働運営
開室日・時間	戸塚: 月曜~金曜 週5日		白金: 週4日

(1) 設立経緯

設立にあたって、2つの出来事が大きな影響を与えている。

1つめは、1995年の阪神大震災のとき、集会室を間借りして、学生がコーディネートをしなが、約120人の学生がボランティアを行なったことである。それに対して、教職員たちもカンパし、学生たちの活動をバックアップした。

また2つ目は、1996年5月の「ジュンコアソシエーション(NGO)」の立ち上げである。東南アジアの経済について学んでいた学生がベトナムを訪れ、帰国後、事故で死亡した。ベトナムの子どもたちのために何かしたいという矢先の事故であった。その思いを生かすために、同じゼミの学生がアソシエ

ーションを立ち上げ、小学校の建設、楽器・文房具の寄付、フェアトレードの売り上げをベトナムに還元して奨学金にあてる、などの活動を行なっている。

これら2つの動きによって、大学と学生たちのボランティアに対する意識が高まった。その後、1997年、森田前理事長がこれらの動きを見て、120周年記念プロジェクト事業として、ボランティアセンター構想を提起した。そして、1998年5月、ボランティアセンターが設立された。当初は法人で運営していたが、対象とする人数が膨大で、組織として小回りがきかないため、2000年、明治学院大学ボランティアセンターに移行した。また、当初は戸塚キャンパスのみにセンターが置かれていたが、2001年から白金キャンパスにもセンターが設置され、両キャンパスとも専任コーディネーターが配置されている。

(2)目的

目的として、以下の2点が掲げられている。1つ目は、「大学におけるボランティア教育」であり、学生がボランティアを体験することによる市民教育を目的としている。単なる体験で終わりではなく、研究へ結び付けて学び、ボランティアを通じて学んだことが、人間的な成長や卒業後も一市民としての活動に生かされることを願っている。

2つめは、「ボランティアとしての社会貢献」である。センターとして学生をアレンジして、一緒に地域の課題に取り組んでいる。また、大学のスペースを開放したり、教員の専門家を市民団体に紹介するなど、できる範囲で取り組んでいる。

(3)運営方法

*センター長：大学教員

*コーディネーター：2キャンパスに1人ずつ（嘱託）

戸塚：谷津倉さん（常勤） 白金：大島さん（非常勤）

*学生スタッフ

99年から学生スタッフが参加、立て看板の設置や福祉サークルへの呼びかけによって集まった。

現在、1年生8人、2年生2人、3年生10人、4年生1人の計21人で、参加の濃淡はばらばらである。1・2年生は戸塚キャンパス、3・4年生は白金キャンパスという移動があるため、困難な点もある。社会福祉系の学生が多いが、経済、国際などの学生もいる。男女比は半々ぐらい。

*活動推進委員会：センター長の諮問機関

活動推進委員（ボランティア活動支援に関心がある教員5名と地域の市民活動リーダー1名）で企画を立案し、報告する。学生スタッフ、コーディネーターも同席。

*運営委員会：学長を委員長とする。

教員役職者、学生部長、教務部長、センター長、事務局長などで構成
センター長の承認、コーディネーターの人選、予算決議など

(4)現在の活動内容について（活動プログラム、年間行事など）

ボランティア・コーディネート（相談・情報提供・V募集）

情報収集

コーディネーター自らが地域に出て行って、情報を収集する

ボランティア保険の代行手続き

講演会・講座（ノートテイクなど）の開催

講義への協力

地域スポーツ交流祭の開催

地区連合会（戸塚区地域振興課）、ボランティアセンター、体育会の学生との共催企画（36サークル、900人）

自分たちの得意分野を活かした社会貢献

災害ボランティア養成も兼ねる

炊き出し（食材を安く仕入れる際に学生が地域とネットワークをつくっている）

ボランティア系サークルの合同説明会を開催

地域のボランティア祭に参加

新入生へのボランティア活動に関するアンケート調査（2000年～）

学生がどういう分野のボランティアに関心があるのか、高校のときの経験など。大学に入ってからやりたいという人が7割いる。

SONY とのボランティアファンド（3年計画）学生対象

松下電器産業とボランティアセンターとNPOで、ボランティアに関する講座を共催（市民と学生）

講座・講演は基本的に公開、地域に大学を開放

小学校・中学校・高校との連携（戸塚）

総合学習の時間に学生を派遣し、学生がボランティア体験を報告する。学校から、大学生のボランティア体験を聞きたいという依頼があり、大学生も発表することによってリアクションが帰ってくるため喜んでいる。

「学生ボランティア通信」の発行（学生スタッフ）

地域にも発送し、情報を通じた交流を行なっている。

(5) センターの利用対象者

ボランティア活動希望者の対象として、明治学院大学の全学生、教職員に対応している。活動依頼者としては、地域からのニーズも受け付けている。ただし、個人からの依頼（障害をもつ個人からの要請など）は、できるだけ社会福祉協議会をとおすなどの対応をしている。また、卒業生、高校・中学生のコーディネートもしている。

登録制をとっていないため、コーディネーターが気付かない間にボランティアに行ってしまった学生については、保険に入っていない場合がある。そうしたケースで事故が起きるとカバーしきれない。

(6) 利用状況

利用する学生数は、白金キャンパスでは、閲覧こみで1日に10～15人程度で、戸塚キャンパスではもう少し多い。情報掲示板の利用が多く、メール、電話での問い合わせもある。夏休み前は利用者が特に多い。依頼件数は、常時掲示しているもので50件程度あり、プログラムは70～80ある。

電話での問い合わせは、1日に2～3件ある。ホームページでもボランティアセンター主催の企画案内を行なうが、安全なもののみ掲載している。ボランティアに行く学生には、手引書を配布し、ボランティアをするにあたっての心構えを伝える。

(7)活動分野

依頼内容で多いものは、高齢者・障害者介護、施設ボランティア、自閉症・ひきこもりの子どもの遊び相手などである。活動希望者の希望分野は、子どもと遊ぶものや海外スタディツアーが人気である。国際NGOや環境系サークルへの参加も多い

(8)相談記録の有無

有・

登録カードもなく、どちらかといえば学生本位の進め方をしている。

(9)ボランティアセンターの取り組みが大学の授業や研究・教育プログラムとリンクしている事例

総合学習「ボランティアと市民社会」

2回ずつくらいのチェーンレクチャー、教員とコーディネーター

経済学部「社会参加実習」

半年で40時間以上のボランティア体験(2単位)。教員とコーディネーターで担当している。センターで培ってきた活動先を厳選して、受講生がその中から選択し、希望のところで活動する。オリエンテーションをして、中間報告でワークショップをもって、最後にレポートを提出する。

政治学科「フィールドワーク」

学生が自分でテーマを選んで取り組む。学生の相談に乗っている。

社会福祉学科「実習」

実習担当の職員がいるが、センターでもっているネットワークを紹介する形で協力している。

国際学部「郊外実習」海外実習プログラム

あとは個別の先生が授業やゼミの中で取り組んでいるものもある。

(10)その他

地域との連携がうまくいっている理由として、以下の出来事が関係していると思われる。

* 99年、地域の生涯学習講座にコーディネーターが参加し、そこからつな

がりができる

* 庶務課：知的障害者の就労支援（ジョブコーチ）

戸塚キャンパスのチャペルの清掃、食堂のトレイふきなどを行い、それを援助する形で、学生もボランティアで参加している。また、作業所のパン・クッキーをキャンパス内で販売している。

2．ボランティアセンターの課題や今後の目標について

(1) ボランティアセンターの課題（運営上の困難な点、問題点、施設や予算などの条件面）

職員の配置

1人なのでもう1人ほしい。

学生ボランティアスタッフ育成に集中するスタッフが必要である。現在は丁寧な対応ができていない。

施設

事務室以外に学生が自由にミーティングできるような部屋がほしい。

予算

年間予算、2キャンパスで200万円（活動費、資料費、講師謝礼、アルバイトなどの人件費も含まれる）光熱費・電話代は含まれていない。

コーディネーターは嘱託、白金は非常勤、戸塚は常勤

8月は給料が出ないが、出勤している。

(2) ボランティアセンターの今後の目標（活動内容の改善、人材・資源の拡充など）

スタッフの育成がうまくいけば、学生スタッフが自由にできる企画がほしい（助成金をとってくる）

学生がボランティア・NPOについて情報検索できるパソコンがほしい（資源の拡充）

書籍・資料が図書館とダブらないように整理・拡充（資料の管理）

海外のボランティア文献まで手が回っていない。

プロジェクトごとにすすめたい

他のボランティアサークルと一緒に一つのことをするプログラムがほし

い

ボランティアサークル系連絡会などをつくり、共同企画ができないか、まだ検討中である。

3. 所感

戸塚校舎のコーディネーターである谷津倉さんに白金校舎まで来ていただき、白金校舎でヒアリングを行った。

明治学院大学は、大学と学生との連携がうまくいっている例として、参考になる点が多い。コーディネーション業務は大学の責任で行い、また、4年に入れ替わってしまう学生だけでなく、先のことを考え、全体を把握する立場で職員が配置されている意味も大きい。そして、イベントの企画・ネットワーク・情報交換などは学生主体で行うことが、学生へのセンターの認知度を高め、活性化にもつながると思われる。

また、地域との連携でもうまくいっている例として、参考になる。コーディネーター自らが地域に出かけていき、ネットワークをつくるなど、地域との連携においては、コーディネーターの力量が大きく関わっていると思われる。

(文責：足立 陽子)

DATA 3 淑徳短期大学ボランティア情報室

【所在地】

〒174 - 8631

東京都板橋区前野町5 - 3 - 7

TEL : 03 - 3966 - 7631 FAX : 03 - 3966 - 8160

【調査日】

2002/ 09 / 27 15 : 00 ~ 16 : 20

【回答者】

塩野 敬祐さん(教授・社会福祉学科)

桜井 伊佐子さん(Vコーディネーター)

1. ボランティアセンターの概要

設立年月	1993年 4月		
ボランティアセンターのタイプ	大学主導設置型	運営形態	学生との協働運営
開室日・時間	火曜 - 木曜 10 : 00 - 16 : 30 金曜 10 : 00 - 13 : 00		

(1) 設立経緯

淑徳短期大学では、もともとボランティアサークル活動が活発に行なわれていた背景があった。そうした中、1985年(昭和60年)4月に元・全国社会福祉協議会勤務の木谷宣弘先生が、社会福祉学科教員として赴任する。

木谷先生はまず、自身のゼミにて“サービスラーニング”的な実践 地域の社会福祉施設でボランティア活動を行い卒業論文にするもの をスタートさせた。その後、木谷先生が学生部長になった際に、社会福祉学科の授業の1つに、地域で年間90時間のボランティア実践をする授業「ボランティアワーク」をスタートさせることとなり、その調整機関として「ボランティ

ア情報室」(以下、情報室)が設立された。

その経緯から、情報室は大きくわけて、2つの機能がある。1つ目は「ボランティアワーク」の事務補助をする機能、2つ目は全学的にボランティアセンターとしてのサービスを提供するという機能を併せ持っている。

(2)目的

目的は“地域に開かれた活動を展開していく”ことである。その方法の1つに学生のボランティア活動を位置づけ、その活動を支援すると共に、地域の様々な団体やグループとの連携・協力関係を築いていっている。

(3)運営方法

運営は、専任ボランティアコーディネーター、相談役、学生ボランティアスタッフによって行われている。

専任ボランティアコーディネーターは1名置かれている。前職の特別養護老人ホームで、施設ボランティアコーディネーターとして従事していた桜井伊佐子さんは、そのキャリアを生かし日々の相談調整業務に携わっている。

ボランティア情報室の運営に関しては、ボランティアコーディネーターに加えて、教員のバックアップができる体制にもなっている。相談役の塩野敬祐先生は情報室の理解者であり、大学とのパイプ役でもあり、ボランティアコーディネーターのみで決定できない事項がある場合は、その相談に応じている。

学生ボランティアスタッフは2002年現在は4名。広報誌づくりや事務のサポートを行っている。

(4)現在の活動内容について(活動プログラム、年間行事など)

現在の活動内容は、主としては6つある。

第1は、情報室の運営である。これには、学生へのボランティア情報の提供、ボランティア保険の受付などがあたる。第2は、学生のボランティア活動支援である。地域から寄せられるボランティア依頼に対応して学生に活動先を紹介したり、学内のボランティアサークルの支援が挙げられる。第3は、授業「ボランティアワーク」の事務補助である。学生達は年間90時間の活

動であるため、通年の業務となる。第4は、図書資料の貸し出しである。第5は情報誌の発行である。これは、学生ボランティアスタッフとの協働作業で行われる。第6は、ボランティア活動に関するさまざまな関係機関・団体との連携である。学生がボランティア活動を行う上で、多くの機関・団体とのネットワークが必要であり、その構築も業務の1つであるといえる。

(5)センターの利用対象者

基本的には、短期大学の全学生、教職員が利用対象となる。ボランティアの活動先を紹介するのは、学生に主である。教職員からは授業のゲストスピーカーの照会や情報室の資料閲覧を希望されたりするケースが多いという。また、地域の社会福祉施設や関係機関からのニーズも受け付けており、ボランティア依頼やイベントの共催、種類の相談対応がある。

2001年度実績としては、学生673件、教職員36件、学外394件、合計1103件の相談対応をしたとなっている。

*

個人からのボランティア依頼については、学生が対個人の活動をするにはリスクが高いため情報室で受理する際には、所属施設や関係機関との連携が十分できる場合にのみ紹介するようにしている。

(6)活動分野

情報室へ寄せられる相談で多いものは、学生や教職員の場合、ボランティアの情報提供を求めるもの、ボランティア紹介・調整に関するもの、ボランティア活動のフォローアップ、学習支援などである。学生の活動希望分野で多いものは、やはり社会福祉の分野である。

一方、地域の社会福祉施設、関係機関からの相談で多いものは、ボランティア依頼やボランティアの情報提供を求めるものとなっている。

(7)相談記録などの有無

有 ・ 無

相談は活動内容ごとに記録化されている。毎年「活動報告書」が作られ、年間の相談件数が数値化されて表されている。

(8) ボランティアセンターの取り組みが大学の授業や研究・教育プログラムとリンクしている事例

情報室では、授業「ボランティア・ワーク」への事務補助・支援を業務の一環として位置付けている。学生が1年間に90時間、1か所の活動先でボランティアをするプログラムであり、1年を通じてサポートしている。たとえば、4月には必ず活動先の社会福祉施設の先生にも大学へ集まってもらい、プログラムの説明会を行なっている。また、活動先へのニーズアンケートも実施して声を拾い上げ、プログラム運営に反映させている。その他、プログラム運営に必要なきめこまやかな調整を、学生と双方向で行なうことを心がけている。

(9) その他

「ボランティア・ワーク」は、継続的に長期（1年）に渡り学生が活動する内容である。活動先にとっては“あてにできる存在”として喜ばれている。その意味でも、地域と短期大学とのパートナーシップの掛け橋となっている。

なお、短期大学周辺以外の活動先であっても学生自身が開拓した場合は、認知している。

2. ボランティアセンターの課題や今後の目標について

(1) ボランティアセンターの課題（運営上の困難な点、問題点、施設や予算などの条件面）

現在のところ、課題としては以下の3点が挙げられる。

第1には、「ボランティア・ワーク」の履修者の減少である。スタート当初は80名程度の履修生がいたが、2002年現在で20名程度に減少している点があげられる。理由はいくつかある。そもそも短期大学の入学定員数が半減していること、福祉レクリエーションワーカーの資格認定のための必修科目としての位置付けがなくなったこと、社会福祉に関する資格ができるにつれ、そちらの実習が忙しくなってボランティアワークまで履修できなくなっていることなどが挙げられる。意義は高くとも、経営が厳しくなればリストラ対象になる恐れも否めない。

第2には、学生のリスクマネジメントの問題。学生がボランティア活動を

するにあたり、様々なリスクが考えられる。活動先での事故やトラブル等を未然に防ぐ重要性を認識している。

第3には、ボランティア情報室の組織上の位置づけがあいまいであり、ボランティアコーディネート業務に対し、他の教職員の理解が十分ではないことである。

(2) ボランティアセンターの今後の目標（活動内容の改善、人材・資源の拡充など）

2003年度には開設10周年を迎える。学科再編も予定されている折から、今後の情報室のあり方を模索している。

3. 所感

淑徳短期大学ボランティア情報室は、現在では全国各地に設立されている大学ボランティアセンターの先駆的存在である。ヒアリングをさせていただいての所感はいくつかある。その1つは、設立の経過からして、コンセプトがはっきりしているということであった。すなわち、「ボランティア・ワーク」授業とボランティアセンター機能を担う2つの明確な柱のもと、着実に歩んできた蓄積を感じ取れた。

また、地域とのパートナーシップが強固にあるという点も、大きな特徴である。情報室が設立される以前から、地域とのつながりはあったというが、丁寧にコーディネートした学生が、地域の活動先でボランティアをする中で、双方がより良い協力関係を築いてきたものと思われる。

最後に、“適材適所”の言葉を挙げて締めくくりたい。情報室の運営のために、短期大学側が配置している「人」についてである。相談役の塩野先生は、以前は地域の障害者施設で勤務されておられた経験をお持ちであった。当時は、学生を受け入れる立場であったという。木谷先生が退任されるにあたり、その後任として大学教員になり、情報室の相談役も担当されることとなる。そのため、大学と地域との連携は、問題なく継続できることになったという。一方、日常業務にあたる桜井ボランティアコーディネーターは、特別養護老人ホームでボランティアコーディネーターとして勤務されていた経験をお持ちであった。そのため、施設の実情とボランティアコーディネー

ト業務の双方の理解ができる。少ないスタッフで良好な運営を目指すためには、属人的な要素を考慮する必要がある。円滑な運営のために専門性の高い職員を配置していることが、学生ボランティアセンター発展的運営の大きな鍵だと思った。

(文責：南 多恵子)

DATA 4 国際基督教大学(ICU)

サービスラーニング設置準備室

【所在地】

〒181 - 8585

東京都三鷹市大沢3 - 10 - 2

TEL : 0422 - 33 - 3687 FAX : 0422 - 33 - 3229

【調査日】

2002/ 09 / 27 10 : 00 ~ 12 : 00

【回答者】

山本 和さん(教授・国際関係学科長)

小島 文英さん(準備室コーディネーター)

1. ボランティアセンターの概要

設立年月	2003年4月 (正式オープン予定)
ボランティアセンター のタイプ	大学主導設置型

(1) 設立経緯

ICU は教養学部のみ単科大学であり、理念として「リベラル・アーツ」教育を掲げ、実践してきた。以前より、大学の教学プログラムではなく、単位習得を伴わない課外活動として以下のプログラムが実施されてきた。タイでのワークキャンプ(1982年～) 同国パヤップ大学と共同で、毎年3月の春季休暇中に約2週間、ICUの学生25名前後と教員2名で参加し、タイ東北部の山岳民族の村で、ホームステイをしながら教会堂を建設する 点訳サークル(1977年～) 全盲の学生への支援活動。

こうした背景のなか、1995年学内の教学プログラム改革委員会から理事会に提出された報告書の中で、「サービス・ラーニング」の教学プログラムが

提案された。その後各種委員会を経て、現在までに、いくつかの単位習得を伴うプログラム(詳細は後述)が開始された。

サービス・ラーニング教育の拡大に伴い、本格的にそれに対応する機能を持つ部署を設置するということになり、2003年4月より「サービス・ラーニング・センター」を設置することとなった。2002年9月時点では、サービスラーニング設置準備室として活動している。

(2)目的

サービス・ラーニング・プログラムに関する全般的な業務の実施、特に実習先の確保、学生の希望とのマッチング、連絡調整、学生からの相談対応など

(3)運営方法

専任コーディネーター：小島文英さん

アドバイザー：山本和先生

学生ボランティアなど

(4)ボランティアセンターの取り組みが大学の授業や研究・教育プログラムとリンクしている事例

「国際インターンシップ」(1996年度開講)

国際的な活動を行っているNGO、国際機関等で30日以上、無償のボランティア活動を実施。(通常、夏期休暇中)

「コミュニティー・サービス・ラーニング」(1999年度開講)

三鷹市、アジア学院(栃木県西那須野)、あるいは地域の社会福祉施設で、30日以上無償のボランティア活動を実施。(通常、夏期休暇中)

一般教育「サービス・ラーニング入門」(2000年度開講)

サービス・ラーニングに関する基本を学んでいく。「国際インターンシップ」「コミュニティー・サービス・ラーニング」に参加するための準備を行うものとして開講する。

(5) その他

「サービス・ラーニング入門」を毎年 150 名近い学生が履修しており、その中で「国際インターンシップ」の履修者は毎年 20～25 名、「コミュニティー・サービス・ラーニング」のそれは 18 名(2001 年度)である。

2. ボランティアセンターの課題や今後の目標について

(1) ボランティアセンターの課題(運営上の困難な点、問題点、施設や予算などの条件面)

サービス・ラーニング教育に関わる教員の負担増の問題 サービス・ラーニング教育は通常の講義形式の授業と比べると、教員の負担が大きい。受け入れ先との連絡調整、海外インターンシップでの引率など、インターンシップ期間中の事故防止の対応などである。また、学内でこの教育プログラムを担当できる教員が限られていることもあって、特定の教員に負担が集中しているのが現状である。

(2) ボランティアセンターの今後の目標(活動内容の改善、人材・資源の拡充など)

今後、インターンシップ実習先の拡大や、インターンシップ教育に関わる人材を確保していきたい。また、学内で一層この教育へ対する理解者を増やしていきたい。

3. 所感

- * 単なるボランティアではなく、ICU の掲げる「リベラル・アーツ」教育プログラムの一環としてサービス・ラーニング教育を実施しており、サービス・ラーニング教育に関して国内の大学でトップランナーといえる。
- * 海外インターンシップでの事故等のリスク管理には早くから取り組んでおり、ガイドラインの作成、緊急時の連絡網の整備などを実施している。
- * 国内の他大学の多くは、一部の教員だけが学内でサービス・ラーニング教育に取り組み、「孤軍奮闘」しているのが実情である。それに対して、ICU はこの教育を「理念」のレベルから捉えて一貫して取り組んできた。例えば、同大学は就職直結型のインターンシップは理念と異なる、として国際イン

ターンシップの実習先として企業を認めていない。実習先としては、非営利である国際 NGO、国際機関に限っている。

(文責：秋葉 武)

DATA 5 龍谷ボランティア・NPO 活動センター

【所在地】

〒612-8577

京都市伏見区深草塚本町67 深草学舎紫光館1階

TEL: 075-645-2047 FAX: 075-645-2064

e-mail: npo-naka@rnoc.fks.ryukoku.ac.jp

【調査日】

2002/ 05 / 23 17:30 ~ 20:00

【回答者】

大林 稔さん(センター長)

西 まゆさん(職員 兼 大学院生)

1. ボランティアセンターの概要について

設立年月	2001年		
ボランティアセンターのタイプ	大学主導設置型	運営形態	学生との協働運営
開室日・時間	9:00~17:00(原則)		

(1) 設立経緯

阪神淡路大震災などをきっかけに、学生のボランティア・NPO 活動に関する関心は高くなっている。しかし、これまではボランティアのコーディネート経験のある教授がおり、情報を持っている教授が対応するなどの個別なものであった。そして、既存の団体での活動では満足のできない学生は、自己の思いの表現方法として自分達でNPOをつくるということに関心をもっており、非常に意欲的である。しかし、地域からも学生のボランティア・NPO 活動に対するニーズはあるものの、それをどのように学生に伝えればいいのかわからないなどの問題があった。大学に対する地域・社会からの期待は、

学生というボランティア供給源の提供だけではなく、図書館などの施設である物的資源や専門的な知識をもった教員などの知的資源での貢献をも求められている。この様な状況から大学におけるボランティア・NPO 活動に対応する専門部署の必要性が求められるようになり、学生の社会参加と新しい教育の実現をめざし当センターの設立が決定された。(ホームページを参考)

(2)目的

『共生(ともいき)をめざす建学精神の追求』

私たち人間は、物を所有し操作するだけではなく、人や自然に触れあうことを通して、相手を知り自己を知る。ボランティア・NPO 活動とは、この意味でひとつの共生(ともいき)の教育と研究である。センターの活動は、教育的な視点から見ると、臨床的で総合的な視野を持った人間を育てることで、これを研究的な視点で見ると、研究活動の諸活動に自ら加わることにより認識を深める参加型教育である。「一切の人間は平等に真実心を与られているという親鸞精神にもとづいて、そのことを自覚し、真に人間たるにふさわしい世界をひらくことをめざし、深い学識と教養とをもって大衆の一員として努力する人間の育成をめざす」とする建学の精神を具現化するものとして、学生・教職員のボランティア・NPO 活動の推進・促進とそのための環境整備を行う。センターは、営利を目的としないボランティア・NPO 活動を通じて、相互に学びあうサービ斯拉ーニングという共生の理念を具現化し、本学の教育研究に寄与することを目的としている。(ホームページより抜粋)

(3)運営方法

センター長：専任の教育職員の中から、学長が指名

副センター長：専任職員の中からセンター長が推薦し、学長が委嘱

センター委員：センター長の推薦する専任職員、若干名

コーディネーター：嘱託職員

学生スタッフ：現在 20 名



(4)現在の活動内容について(活動プログラム、年間行事など)

ボランティア・NPO 活動を通じた新しい教育

* ボランティアコーディネート

- 学生・教職員と地域の NPO とを繋ぐためボランティア・NPO の情報提供とその相談に応じるボランティアコーディネート活動を行う。

* 学内ボランティア・NPO づくりの支援体制作りとその試行

- 学生・教職員が NPO を自ら作ろうとするときに、インキュベーター(孵化器)の役割を果たす。

* シンポジウムの開催

教育研究活動とボランティア・NPO 活動との有機的連携

* 教育研究活動との連携

- 学生の NPO へのインターンシップ制度、NPO 関係者の大学での講義・授業、NPO 人材育成、共同での調査・研究など、社会に向けての新しい教育を提言していく。

* 全国の NPO センターとの連携

ボランティア・NPO 活動の社会的環境整備

* インターネットを使ったボランティア・NPO 活動へのインフラストラクチャーづくり(ネットマッチングなど)

* ボランティア・NPO 活動に関する調査・研究

- 調査・研究結果をもとにシンクタンクとしての政策提言を行い、社会的環境整備を整える。

その他

* 緊急事態に対応したボランティア体制の整備

* 海外のいくつかのボランティア団体との連携

* 広範なボランティア活動のネットワークの構築

- 浄土真宗のボランティア活動組織であるテラネットとの提携など

(以上、ホームページ抜粋)

(5) センターの利用対象者

ボランティア活動希望者としては、龍谷大学の全学生、他大学生、地域住民、教職員など市民というように、幅広い人々が対象となっている。活動依頼者は、龍大生、地域住民である。

(6) 利用状況

利用する学生数は、1日に2～3人である。

(7) 活動分野

活動希望者の希望分野は、瀬田キャンパスでは社会福祉分野、深草キャンパスでは国際分野のボランティアが多い傾向にある。

(8) 相談記録の有無

有 ・

受け付けの際に、簡単な受付票は書いてもらっている。

(9) ボランティアセンターの取り組みが大学の授業や研究・教育プログラムとリンクしている事例

商店街でのゼミ単位での取り組み、国際NGOのチェーンレクチャー（対象は地域住民も含めて）を展開している。

2. ボランティアセンターの課題や今後の目標について

現在の課題としては、今は立ち上げて間もないのでコーディネートしかしていないが、それだけではつまらない。運営として大学主体では空洞化が起こってしまい、学生だけに任せると形骸化が起こってしまう。そこで、学内事業として、また学生主体で取り組んでいきたい。今は、自己組織が立ち上がりつつある。

学生からの申し出は、まだまだ少なく、1日2人程度。ノートテイクについては、大学がアルバイトとして確立しているので、センターとの連携はない。また、学生の認知度はまだまだ少なく知られていない。授業で呼びかけると、その分野の学生の訪問が急に増えるといった状態。認知度を上げることは今後の課題であり、また方法としてもサークルのように地道な活動をし

ている。

ボランティアについての定義は学内でも論議中。しかしながら、国際ボランティア関係者が多いせいか、有償であることを肯定的に捉えているため、報酬の有無によって選択はしない。ただし、ボランティア活動としてふさわしいかどうかの検討はしている。

3 . その他・所感

コーディネートの中で、責任がとれないため、マッチングまではしていない。また、個人からの依頼については、リスク管理ができないため、受けていない。

構想としては、大阪 NPO プラザのように様々な団体に場所提供をして、活動をしてもらえるようなセンターにしたい。ボランティアの受け皿の開拓としては、社協などの機関とのネットワークを結んで、情報を交換したり共有したりという中間組織としての位置付けで活動している。

キャンパスが分かれているため、他キャンパスの学生に対するコーディネートが難しい。現在は、出張サービスでの相談をしている。センターのある深草キャンパスでも、学生が学ぶ建物から離れているため、認知度が低く、かつ利用しづらい所に位置している。建物の雰囲気としては、非常に硬いイメージがあり、何気なく行くにはやや抵抗感が感じられるかもしれない。

(文責：白樫 俊)

DATA 6 きょうと学生ボランティアセンター

【所在地】

〒604-8155

京都市中京区烏丸通錦小路西入る占出山町308 ヤマチュウビル2F

TEL: 075-254-8617 FAX: 075-254-8627

e-mail: kgvc@npo-net.or.jp URL: <http://www.npo-net.or.jp/kgvc>

【調査日】

2002/ 05 / 30 18:30 ~ 19:30

【回答者】

赤澤 清孝さん

1. ボランティアセンターの概要について

設立年月	1996年 10月	ボランティア センターのタイプ	特定非営利活動法人 (NPO)
開室日・時間	13:00 - 19:00 休日: 日、月、祝祭日(お盆・年末年始)		

(1) 設立経緯

1995年に起こった阪神淡路大震災を機に、立命館大学政策科学部の学生が主体となり、ボランティア情報センターを立ち上げていたが、まもなく閉鎖された。しかしながら、学生のボランティアに対する意識は高まる一方で、情報が無いためにできなかった(と、思っていた)。9月にそれまで関わりのあった北区の京都生協内にはじめて立ち上げた。その後、事務所を立命館大学内に移転し、中京区のコープイン京都へと移転し、現在の場所に至る。

(2) 目的

社会の中にある様々な課題に対する認識を広げ、その解決に向けての役割を果たし、やがては自立した存在として主体的に社会づくりや社会変革を担

うことのできる市民を育むことをめざし、活動理念を実現するために、地域のボランティア受け入れ組織と協働して、大学生に対してボランティアコーディネーション事業を行う。（ホームページより抜粋）

(3) 運営方法（体制）

有給職員：2名

学生スタッフ：20名

分野別にグループを作って、ボランティア先の開拓や相談などを行う

(4) 現在の活動内容について（活動プログラム、年間行事など）

センターで扱う活動テーマは、社会福祉、国際交流・協力、環境、アート・芸術などさまざまである。

ボランティア活動についての情報収集・発信

* ボランティア活動に関する情報・資料・書籍の収集・提供

* ウェブサイトによる情報発信

* その他、広報・啓発活動

ボランティア活動の機会提供、支援

* ボランティア活動体験プログラムの実施

* ボランティア活動に関する個別相談

人材育成・交流支援

* 研修プログラムの実施

* 交流の場の提供

ボランティア受け入れ組織に対するボランティアマネジメント支援

* 社会福祉施設やNPO/NGOに対する個別相談、情報提供

* ボランティアコーディネーター（ボランティア受け入れ担当者）に対する研修プログラムの実施

（ホームページより抜粋）

(5) センターの利用対象者

ボランティア活動希望者の対象としては、地域全体ではあるが、特に京都の「学生」を対象としている。活動依頼者は、社会福祉施設が中心である。

(6)利用状況

依頼件数は、約100団体（受け入れ団体）である。

(7)活動分野

依頼内容で多いものは、老人関係は少なく、障害児者（特に、余暇活動の支援）が多い。

(8)ボランティアセンターの取り組みが大学の授業や研究・教育プログラムとリンクしている事例

大学コンソーシアム京都での取り組み。

2. ボランティアセンターの課題や今後の目標について

全ての分野に精通することは不可能なので、専門分野をつくり、専門スキルを持ったスタッフでグループに分かれて、いかに相談を含むコーディネートをしていくのかを、常に模索している。初心者ボランティアが多く、希望活動分野が定まっていないボランティアに対して、どのようにコーディネートをしていくのか。また、そのようなボランティアを含めて、学生ボランティアを受け入れてくれる環境整備をし、それに値するコーディネートのスキルアップとスタッフ養成をいかにしていくか。

3. その他・所感

初心者ボランティアを中心にした「学習 体験 実践」のプログラムの欠点として、ボランティア活動の始めやすさは止めやすさというリスクも背負っていることを考えていかなければならない。

（文責：白樫 俊）